



中華民國 台灣投資通信

発行：中華民國 經濟部 投資業務処 編集：野村総合研究所(台湾)

March 2019

vol. 283

■今月のトピックス

台湾の観光政策の状況と今後の日台での観光産業交流機会

■日本企業から見た台湾

～スタートアジア、藤原徹平董事長インタビュー～
ダイレクトマーケティングで台湾の通販を変えるスタートアジア

■台湾進出ガイド

会社法改正の概要3

■台湾マクロ経済指標

■インフォメーション

【今月のトピックス】



台湾の観光政策の状況と今後の日台での観光産業交流機会

台湾の人口は2024年以降減少を始めると予想されており、人口減少による経済へのインパクトを抑えるために、海外旅行分野の強化は台湾の今後の発展にとって重要テーマのひとつである。台湾から日本へは毎年約470万人が旅行しており、日本への外国人旅行者のうち台湾は三位にランクインしている。日本から台湾への観光旅行者も毎年約190万人おり、双方で毎年700万人近い規模の往来がある。日本人観光客の拡大と日台観光交流をさらに深めていくためには、筆者は、積極的な日台間の地方同士の航空便数増加、日本の修学旅行者の開発継続と台湾の地方都市観光のストーリー性強化を、実施すべき三大重要テーマと考える。

はじめに

国家發展委員会の公開資料によると、台湾の人口は2024年にピークを迎え約2,374万人となり、その後人口は減少を始め、2050年にはわずか2,078万人にまで減少するとみられる。人口規模減少が地方経済発展に大きな衝撃となることから、積極的に海外旅行者を台湾に呼び込むことで将来の国内市場の不足分を補っていくことが、台湾の今後の発展にとって重要なテーマとなる。

日本や外国人旅行者の傾向変化分析

交通部観光局の公開資料によれば、海外からの台湾旅行者数は2015年に1000万人の大台を突破し、2018年には1,107万人に達し、直近5年の海外旅行者の成長率は約3%となっている。

日本関連の分析をさらに進めると、2014年には日本から台湾への旅行者は約163万人、2018年には約197万人と、5年間で約21%成長している。その他、交通部観光局が公表した訪台旅行者消費動向調査によると、2017年に日本人訪台客が訪れた

観光スポットは台北市・新北市が中心で、訪問観光スポットのトップ5は九份・士林夜市・台北101・故宮博物院と中正紀念堂となっている。外国人旅行者全体と日本人旅行者とを訪問スポットで比較してみると、筆者は、他の外国人旅行者と比べて日本人旅行者は歴史文化背景に富んだ建造物を観光スポットとして好んで訪れていることに注目した。例えば龍山寺・行天宮・忠烈祠・蓮池潭や赤崁樓の訪問率は一般の外国人旅行者より大幅に高い。

一方で、日本の国土交通省航空局公開の都道府県別出国状況および訪台状況の分析を進めると、2016年までに日本から台湾への観光旅行者は1万人を超えており、かつ地方からの出国が訪台旅行者全体の15%を占め、内訳は岩手県・宮城県・福島県・奈良県・広島県・香川県・長崎県・熊本県・宮崎県および沖縄県となっており、うち宮城県・広島県・熊本県・宮崎県と沖縄県の各県ではすべて台湾の空港との定期直行便が運行している。

国土交通省と民航局の公開資料でさらに分析すると、日本国内では函館空港・旭川空港・仙台空港・富山空港・小松空港お

今月のトピックス

よび熊本空港の6ヶ所の空港合計で2017年の日本台湾間航空便の30%以上を占めており、また九州地区やその他の地方空港（宮崎空港・鹿児島空港・那覇空港および石垣空港）と台湾との航空便も20%前後あるなど、日本の多くの地方空港にとって台湾旅行客は主要な旅客源となっている。このことから、直行便は日台間観光交流促進に一定の影響があるといえよう。

近年の日台間観光交流

台湾から日本に旅行する人数は持続成長しており、過去5年間で約68%成長した。2018年には約476万人の台湾旅行客が日本を訪れ、海外から日本を訪れる旅行客の15.3%を占め、国別ランキングでは第三位となっている。

日台間の観光交流活動も近年ますます多様化している。鉄道関連では、2013年～2015年の間に台湾鉄路平溪線と日本の江ノ島電鉄が一日乗車券の無料引き換えキャンペーンを開始し、2018年10月には高雄メトロも江ノ島電鉄とキャンペーンを実施し、スペシャルギフト・一日乗車券やクーポンブックの提供を展開した。他にも、日台双方でのラッピング電車における協力事例もある、例えば2017年交通部観光局の日本向け観光キャンペーン「Meet Colors!台湾」も山陽電鉄と協力し、日本で「Meet Colors!台湾号」のラッピング電車の運行を行った。2019年3月には桃園メトロも阪神電車と協力し、桃園の特色あふれるラッピング電車の運行を開始した。また2019年1月に南海電鉄も台湾鉄路と協力し、南海電鉄の特急ラピートの塗装であるラピートブルーを台鉄の車両に塗装した「藍武士号」の運行を開始し、多くの台湾の鉄道ファンに歓迎された。

今後の日台間観光交流活動に向けて

日台間では毎年700万人規模の往来があることから、双方の観光協力運営を深める方法について、官民共同での模索が可能であると考え。そこで、筆者は以下の三つの方式を日台双方の観光産業関係者に提案したい。

一、日台間の地方空港便数を積極的に拡大

日本と台湾との間の飛行時間は約2～4.5時間程度で、日本の地方の住民にとっては、地元国際空港があれば、東京・大阪などの大都市よりも台湾に行くほうが早い可能性がある。

空港が合計24か所あり、大部分は桃園空港に向けたもので、高雄小港空港と直行便を運行している空港は北海道新千歳空港・千葉成田国際空港・大阪関西国際空港・福岡空港および沖縄那覇空港である。他に桃園運航便以外は台北松山-東京国際（羽田）・台南-大阪関西国際空港・台中-沖縄那覇空港がある。上述の発着空港立地の分布と、日本から台湾への旅行客の傾向から、将来は日台双方の地方空港同士の直行便運行がさらに増える可能性があるだろう。

二、日本の修学旅行客の継続開拓

台湾は日本から近いうえ、親日度が高く治安もよいなどの優れた特長をそなえており、日本の学校では海外修学旅行先として最も好まれており、台湾への修学旅行生人数が1万人に満たなかった2010年度から、2016年度には4.4万人に達するまでに成長し、市場全体の22.4%を占め、2010年度から2016年度まで年平均成長率28.6%で持続成長を続けている。中でも、秋田県・栃木県・石川県・長野県・香川県・熊本県の海外修学旅行人数のうち、70%を超える生徒の修学旅行先が台湾であることは特筆に値する。現在の発展状況からみると、現在は未開拓となっている他の地方都市でも修学旅行市場を開拓できる可能性がある。

三、台湾地方観光のストーリー性強化

台湾には歴史文化に富んだ地方観光資源が数多くあるものの、各名所を紹介するストーリー性のパッケージングにおいてはまだ改善の余地があるといえる。前述の日本人旅行客が訪れる台湾の観光スポットの状況を見ると、日本人旅行客は台湾グルメを体験したり歴史建築物を探訪したりする旅行を好む。しかし、現状は台湾北部地区以外の観光地の訪問率は依然として低い水準にとどまっており、台湾の旅行業者や地方政府、また日本の旅行業者は、北部地区以外の観光スポットでもストーリー性や独自性を打ち出していく強化策や、ユーチューブやInstagramなどのネットプラットフォームの活用などを通じ、より多くの日本人旅行客が台湾旅行に興味をもつよう働きかけを続ける必要がある。

(林宜蓁:y2-lin@nri.co.jp)

2018年12月末までに、日本には台湾との定期直行便のある